



2011/4/1 No.56

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

今こそ福祉の心をもつて



理事長

木下 宣世

去る三月十一日に起こった東北関東大震災は文字通り世界中を震撼させました。死者の数は三月末で一万一三六二人、安否不明者は一万八二九人。戦後最悪の数に上ります。さらに不安を掻き立てているのは福島第一原子力発電所の放射能漏れ事件です。未だに解決がつかず、むしろ事態はさらに悪化しているようにさえ思えます。

阪神・淡路大震災の時も大変でしたが、あの時は局地的に集中して災害が起こったため救援の手も伸べやすかったのに対し、今回は宮城・岩手・福島の三県にまたがる広範な地域に被害が及び、策の施しようがありません。また阪神・淡路大震災の被害は激震による家屋等の倒壊と火災が主でしたが、今回は津波によって町全体が根こそぎさらわれるという壊滅的な被害でした。

家族や親族を失い、不便な避難所暮らしをしている多くの方々のお心を思うと何と云ってお慰めをしたら良いか言葉もありません。家族や家を失い呆然としている人々の映像を見ると涙を禁じ得ません。或いは放射能の恐怖から逃れて、見知らぬ土地へ自分達の家を捨て、町を捨てて避難して行く人々の姿に胸を衝かれる思いが致します。

被災した地域には老人ホームもありました。

子どもたちの施設もあったことと思います。病院や福祉施設も被害に遭ったのです。同じ社会福祉に携わる者としては他人事とは思えません。一日も早い復旧を祈るばかりです。このような国難とも言ふべき未曾有の出来事を前にして私たちに出来ることは何でしょうか。私たちの力は限られています。今すぐ現地に行って何かのお役に立ちたいと思っても、実際は無理です。

でもこれだけ多くの犠牲者が出たのですから、その死を無駄にしてはならないと思います。これだけ莫大な被害を受けたのですからこの失われたものを無駄にしてはならないと思います。この経験は将来に生かさねばなりません。そのためにはまず国民全体が被災者の苦しみ思いを至すことではないかと思えます。思い遣るといいうことです。

たまたま自分の住んでいる町ではなくあの町を地震と津波が襲ったのです。そしてあの町の人々は今筆舌に尽くせぬ苦しみと悲しみを味わっています。この打ちのめされている人々に思いを馳せることから様々な行動が生まれて来るのだと思います。

これは福祉の心と共通します。福祉の心とは、自分たちより弱い立場の人々(老人、子ども、様々な障がいを負っている人等)に目を注ぎ、彼らがその命を精一杯生きるための支えとなることだからです。今こそ国中の人々がこの心を持って被災地の方々のために思いを寄せることができたらと願います。そうすればそこから自然に色々な物質的・精神的援助の働きが生まれることでしょう。そのようにして被災者とその地域が困難を克服し立ち直れるよう心から祈る次第です。

新年度事業遂行にあたり



常務理事

井本 義孝

新年度がスタートした。本年度の法人の歩みについて皆様とご一緒に考えてみたい。大震災から早や一ヶ月。新聞、テレビは連日連夜、被災の惨状を伝えそれを見聞きしながらも、私たちは為す術の無きがごとくに手をこまねいている。何かお手伝いしたいのだけれども、如何してよいか分らないというのが本当のところではないか。私たちは隣人の悲劇に際しては、大変同情的であるのは自他共に容認されるところであろう。まず法人は日赤を通じて義捐金を送る。次に、職員、利用者、および家族など関係者を通じ募金を募る。同時に、要請があれば被災者を受け入れる。既に大貫駅近くに避難をされた高齢者をデイサービスにて受けたとの報告があった。又、現地へ福祉専門職必要との要請があればいつでも対応できるようにしたい。

さて、本年度の法人本来の事業に触れる。三月下旬、公益事業、住宅型有料老人ホーム（望みの門ハイム）の竣工、ならびに開設式に引き続き平成二十三年度事業計画、予算役員会が開催された。新しく前記ハイムがあり残り四室となり七名が入居され好調である

こと、一階に地域包括サポートセンターとしてヘルパー陣が座り二十四時間安心介護の試みを始めた。ハイムの方々には目に見える安心体制となり一石二鳥に思える。今後登録サポーターの質量の強化が期待されよう。地域包括サポートセンターとしてのヘルパーの皆さんの一致団結した働きこそ在宅サービスの向上となり、本年度事業のポイントでもある。

次に、新設特養富士見荘（仮称）の開設に関わる事務の進捗を図らねばならない。事業申請の第一次審査はパスし今月下旬二次審査予定である。定員七〇名、三ユニット、三〇名、多床室が四〇名、鉄筋コンクリート三階建てで、三階に事務室ほかサービス部門がある。着工は七月頃であるが、竣工は来年四月の厳しい工程である。専門職員の確保のためにも、特に医療関係者、ベテラン支援員、相談員等既存施設職員の協力を得ていかなければならない。その為四月一日付けにて開設準備室長ほか職員が発令された。各施設の協力体制が不可欠である事は言うまでもない。国庫補助事業として必ずやり遂げねばならない。さて、このたび、臨床心理士が合格し二名となり認定心理士や関係者も含めて、今後期待される、きめ細かな心のケアのために臨床心理士の新藤紀子さんを室長とし臨床心理室が発足した。法人には学園、かずさの里、方舟乳児園、二箇所の高齢者施設があり、虐待体験者のみならず集団生活のもたらす様々な不適応に対応するなど活躍が期待される。

施設生活が明白に小規模化、家庭規模化されるのは当然であり不可避である。児童擁護施設かずさの里は発足以来家庭的処遇を標榜してきたが本年はさらに一步を進めて現行の室割りを検討し、県当局の支援を受けつつ小規模化をすすめる。

本年度は大震災、放射能汚染、国の財政危機など、日本再生の土壇場である。法人の一人安閑としてはおれないであろう。職員各自が泥をかぶり、どれだけ己を無にして励むか、ひとりびとりの覚悟が問われている年であろう。

望みの門ハイムの開設を迎えて

有料老人ホーム 望みの門ハイム

管理者 室屋 三男

三月二十六日、竣工のご報告と建物のお披露目を兼ね、介護予防センターホールにて、佐久間清治富津市長・福原敏夫富津市市議会議長のご臨席を賜り、開設式を滞りなく終えることが出来ました。これもひとえに皆さまの多大なるご支援、ご高配によるものと心より感謝いたします。

なお、ホームの建設準備については二十二年一月に準備室を立ち上げ、手探りの状態でスタートして、平成二十二年十二月には竣工、二月一日に入居開始となり、一ヶ月後には五部屋、六名の方がご入居されました。



又、開設式当日には、新たに一名の方が入居申し込みをされるなど、順調に推移しております。現在、八十六歳の方が最年長で、平均年齢七十四・四歳であり、昼間は隣接のデイサービスに通う方や、ホーム内に併設されている訪問介護を利用されている方、毎日のごとく自家用車で友人とドライブに出かけられる方、昼夜問わずホールでカラオケに興じる方、ヘルパーさんとの歓談が何より楽しい方など、嬉々とした姿とともに、皆さん、とても穏やかに暮らしていただいているように見受けられます。ご入居者様には、他の有料老人ホームからの転居先として望みの門ホームを選択いただいた方や、将来的な高齢者施設等への入所待ちの待機場所として入居された方も多く、「ここに入って良かった」とのお声をいただいております。

ところで、二十三年三月一日現在の千葉県下の有料老人ホーム数は二六五箇所に及んでおりますが、公益事業として、社会福祉法人が運営するものは当ホームを入れて、わずかに六箇所しかありません。経営的には非常に困難とも言われる十名規模のホームも、極くわずかですが、あえて十名程度の小規模のホームを開設したのは、小規模ホームだからこそ出来るサービス（つながり）を最大限に発揮したかったからです。



○共に暮らす家に住まい、共に暮らす仲間の笑顔に逢いたい
○家庭的な雰囲気のある場所で、安心して暮らしていただけるのが一番の願い
をモットーに、「自分をわかってくれた」と心が安らぎ、「頼る人がいる」という安心感を抱いていただき、「心豊かに過ごしていただける場所」を目指してこれからも入居者様の満足感を最優先に努めて行きたいと思っております。開業はあくまでスタート、皆様方のご協力とご支援を引き続き、お願い申し上げます。

東京望みの門 マノの家

大きな家族の輪

施設長 目黒 眞理

「退寮生の皆さまへ」

暑さ寒さも彼岸までと言いますが、今日は朝から冷たい雨が降り、真冬の寒さに戻ってしまいましたね。その後いかがお過ごしでしょうか？

この度の地震と津波による被害は想像を絶するものでしたし、さらに福島原発の事故が追い打ちをかけ、被災者の方々の苦しみ悲しみを思うと、胸がふさがる思いです。地震後、安否確認ができた方についてはみな無事だとわかり、一安心いたしました。

まだまだ余震が続いています。油断することなく、くれぐれもご自愛の上、お過ごし下さい。二〇一一年三月二十一日

※（非常袋）下着一組、水一本、非常食、懐中電灯、携帯、常備薬などを一袋にまとめておくといいですね。」

東京望みの門の退寮生に出したハガキです。長年にわたる退寮生及びアフターケアの対象者は、ひとり暮らしの方が多いため、地震の日、この家でも深夜まで宿直以外に三名の職員が帰宅できなくなっていたこともあり、手分けして電話でも連絡をとりました。「アパートの玄関で泣いていたの：」「よかった！声が聞けて！怖かったよー！」「ど

うしたらいいの……」と今にも飛んで来そうな人につながったり。短く声を聞くだけで、互いに少し安心できる……という気持ちでした。サンシャイン六〇で仕事だったAさんは、ガラス張りの展望台からしばらく降りることも許されないという怖さのあまり、悲鳴のような電話をしてきて、こちらにもその恐怖が伝わってきました。

聴覚障害者のBさんにはFAXを入れましたがずっと通じません。ハガキへ返信があり、公的機関を含め、誰ひとり、心配して声をかけてくれる事もなく不安だったが、氣にかけてくれる人がいて心強い、うれしいと書かれていました。

各地の退寮生からも心配しての連絡をいただきました。また、その日のうちに、ドイツのヘットカンブ師、スイスのグロース師からも、寮と被災地に暮らす退寮生を案じての入電が。数日後、グロース師が生活されるスイスのバーゼルの教会で、日本の被災者の為に三〇〇名を超える方が集まる会を持ちましたとの連絡もいただきました。

外壁に小さな十字架を付けているこの家の利用者たちとのあいだに、大きな家族の輪ができていると思ふ歩んでまいりましたが、今回、退寮生各々が困難を前にした時、この家を今も拠りどころとし、また、案じていてくれることも、あらためて強く知ることとなりました。

この小さな家に関わるたくさんの娘たち、

退寮生、そして職員が、多くの方の祈りの中に置いていただくことで、支え、守られておられますことを、今回の経験を通してあらためて示され、心より感謝いたします。

婦人保護施設 望みの門学園

楽しい食事 ♥ 楽しみな食事

栄養士 安藤美和子

「じゃがいもがたくさんとれたよ!」「大根の芽が出たよ!」「落花生取りする!」「今度何作るの」などとファームの人たちの声が厨房の裏から聞こえます。学園の生きがい活動にはファームと工房があり、ファームの仕事は施設内外の環境整備と畑仕事です。

畑で収穫した野菜は、厨房にもって来てもらい調理をして皆で食べます。畑の野菜をどう調理するかが厨房のうでの見せ所でこの材料は、こんな料理方法がよいよとか、前に作ったことがあるよとか職員全体の知恵を借り、手を借りながら美味しいものをつくらうと毎日努力しております。

ファームのみんなが丹精込めて作ってくれた野菜は、農薬の心配もなく、旬にたくさん食べられ季節感も味わうことが出来るのがなんとも嬉しい限りです。

私は、昨年の四月に学園に配属され 早一年がたちました。以前の仕事は、病院の栄養士だったので病気の内容によって制限がある

中での食事管理でしたが、健康でどんな料理でも食べさせてあげられることでとても嬉しく思います。

落花生ができたときには、みんなに硬いカラを剥いてもらい甘く煮たり、ピーナッツ味噌をつくったり、ピーナッツ和えにしたりとバラエティーにとんだ料理になります。学園は、育てる楽しみに収穫する喜びまたそれを調理する厨房の喜び、そして出来上がったものを利用者や職員みんなで味わう喜びというたくさんの嬉しいことがあります。旬の食材は暑い時期には身体を暖めるとる効果、寒い時期は身体を暖める効果と身体と心の健康にも素晴らしいと願っています。

人は、生まれてから死ぬまで食べるということと生命を維持しています。しかし、ただ身体に入ればいいというものでもありません。これからは多くの皆さんに食の大切さを伝えていきたいと思っています。



養護老人ホーム 望みの門 楽生園

大地震を経験して



生活相談員 渡邊 由佳

この度、三月十一日に発生した東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。楽生園ではお風呂のお湯が脱衣場まで流れ込み、お湯が半分なくなってしまうましたが、利用者様・職員・建物に被害は出ずにはと胸を撫で下ろしております。

楽生園には岩手県出身の方がいらっしゃいます。その方の息子さん夫妻は今回の地震による津波の甚大な被害を受け、報道でもよく耳にする岩手県大槌町に住まわれています。地震発生直後から親戚と連絡を取り合い、息子さん夫妻が無事で避難所にいることと家は津波で流されてしまったという情報を得ていましたが、息子さん夫妻とは連絡を取れずになりました。

二十二日になって息子さんから施設に電話があり、やっと声を聞く事が出来ました。涙ぐみながら『お母さん心配でずっと眠れなかったよ。』と語りかける利用者様を隣で見て、普段とは違う一面を見れた様に思いました。普



段は楽生園の利用者様という立場が彼女の全てであるように思い込んで接していましたが、楽生園の利用者様という立場は彼女の人生のほんの一つの側面でしかならず、楽生園に入所されるまでにはそれぞれの人生があり、生きている社会は楽生園だけというわけではなく、まさに【家族としての利用者】を認識させて頂く機会となりました。

また津波の被害を受けた地域では今までも津波による被害を受けており普段から津波が起きた場合の避難訓練を行っていたそうです。

避難所が想像以上の津波に飲まれてしまったという話もありますが、一週間前に訓練をしていて津波から逃れる事が出来たという話も多く耳にします。

楽生園でも年に四回、火災が起きた場合の避難訓練を行っています。地震の一週間後の十八日には消防の立会いで夜間に医務室から出火したという想定で行いました。

何度も訓練を行っているという気持ちの緩みがちですが、今回の地震から職員全員が常に高い意識で危機感を持ち、有事の際には利用者の皆様の安全に非難させることに努めたいと思います。



特別養護老人ホーム 望みの門 紫苑荘

八年間を振り返って



生活相談員 平野 吉広

特別養護老人ホーム望みの門紫苑荘に就職して介護職四年、生活相談員として四年、計八年間が経過しました。

介護の世界で仕事をしたいと思ったのは、八年前に亡くなった祖父の入院生活での出来事でした。当時の祖父は、肺炎を患い、带状疱疹もあり会話をするのも困難な状態でした。その状況の中、時間の許す限り、面会に行き、顔を見て安心し、何もできずに帰って行く日々を送りました。

私自身、何か出来ることはないかと悩んでいる中、介護をしていた弟が筆談を交えながら祖父と心の会話をしているのを間近で体験し、何もできなかったことに腹が立っていたことを思い出します。

その中で学んだことは、見た目ではなく、介護の基本である相手と向き合い、寄り添い、相手



の気持ちを汲んで時には、励まし、共に分かち合い、一緒に乗り越えていくことの大切さを学びました。

最近のマスコミ等の報道では、介護の世界は、きつい、汚い、重労働の割に給料が安いとマイナスイメージを発信していますが、私自身は、高齢者の方々から直接的、間接的に関わって行く中でそれぞれの人生経験を通して「関わった人を大事にしないさい」「常に感謝の心を忘れずに生活しないさい」「困っている人が居れば手を差し出さない」「日々、疑問を持って今、自分自身がやるべき事を一生懸命打ち込みなさい」と激励され家族の代わりにお世話をさせて頂いていることへの感謝の気持ちと自分自身の成長する為の糧を頂いています。

今後、私自身がやるべき事は、介護に對してのマイナスイメージを払拭するために閉鎖的なイメージの強い施設イメージを実際に見て、体験をして「何かを感じる」と「できる取り組み、核家族が多い現代、高齢者と関わることの少ない若い世代に介護の素晴らしさを発信して行くことです。

老人デイサービス事業 望みの門デイサービスセンター

「楽しみ」をさがしてみませんか？

生活相談員 立和名康代

東日本大震災の影響を受けた皆様に、お見

舞い申し上げるとともに、亡くなられた方々に、心よりお悔やみ申し上げます。

地震発生から一ヶ月近く経ちましたが亡くなられた方、行方不明者の人数が毎日増えていくのを見て心を痛める日が続きます。そして原発の問題、余震、続く避難所生活とまだまだ光の見えぬ夜を過ごされている被災者の方々。ご家族を目の前で亡くされた方の気持ちは計り知れません。当施設を利用して下さっている利用者様は皆さん幸いご無事でした。しかしながら津波の影響で船や海苔網を無くされたご家族も多いとお聞きました。デイサービスでも計画停電により利用者様にはご迷惑をおかけ致しております。ご家族の都合で一人になる利用者様や独居の方など自宅で一人停電を過ごすよりはデイサービスで職員や看護師が常駐している方が安全だと考え通常営業を開始いたしました。今回の震災を受けて、今の自分に出来ることは何か。改めて自問自答しました。

結論は今を全力で生きること私にはそれしか思い浮かびませんでした。皆さんも各々が色々な事情や思いを抱えていると思います。しかし生きている者の責務として今回の震災で失われた尊い命を無駄にしてはいけないと心から思います。

一日一日を大切に精一杯楽しむ。大切な一日を豊かに夢と希望を持って過ごしていきたいと思えます。

健康な人や若い人は『楽しみ』を自分の

力で得ることが出来ます。しかし高齢になると自分の力だけではその『楽しみ』を得る事が出来なくなってしまう。それが生きる意欲低下につながっていくのだと思います。我々デイサービスの仕事はその人の楽しみを援助し生きる意欲を引き出す事だと思っています。ただし人それぞれ楽しみは違いますし楽しめる能力も違います。個々の違いを見極めて『生きる楽しみ』を提供していくことが理想です。

認知症だからダメ。障害があるから無理。と簡単に諦めるのではなく、そのままは無理でもその人にも『楽しみ』を感じられる様な方法はないのか、やりやすい方法はないのか。その為にもその人の事をよく知る事が大切です。関わりを持って『楽しみ』や『楽しめる能力』を見極めていくことです。そして何が出来るか考える事が私たちの役割です。人が喜ぶ顔を見るのが大好きなスタッフばかりのデイサービスセンターです。皆さん春はすぐそこに待っています。窓を開け外に出てみませんか？

私たちに沢山の声を聞かせて下さい。



知的障害者通所授産施設 望みの門新生舎

三・十一 十四時四十六分

副施設長 森 和浩

国内最大級の地震、そして津波。昔教わったあの関東大震災の映像を思い出すと同時に、それ以上の光景を現実として目のあたりにするのは誰も予想していなかったのではないだろうか。

新生舎はその頃一週間の作業もようやく終わりに近づき、「今週も頑張った、お疲れ様。」と、一安心している頃でした。突然、波のように押し寄せる大きな揺れにその場に身をかがめるのが精一杯。「利用者の確認をしろーっ。火は消したかーっ。」事務室から飛び出した施設長の言葉にそれぞれの現場の職員が「全員いまーす。」「消しましたーっ。」と大声で応えます。揺れの治まった合間に第一避難場所に全員が待避し改めて人員確認。しかし、利用者の表情は驚きと不安と恐怖の顔。今まで体験したことのない事態に全員が戸惑い、お互いに顔を見合わせ誰一人言葉が出ません。施設の立地条件は海岸から直線で二〇〇メートル。地震イコール津波。他にも火災、停電、J Rの運行停止、電話回線・携帯電話の不通、道路渋滞、パニック……。時間の経過に伴い更に条件が悪くなることからできるだけ早い段階で判断する必要があるありました。急いで帰宅準備をし、発生後三十分で

送迎バスは発車しましたが、案の定、駅周辺は渋滞し路線バスの運行は乱れJ Rも運行停止。木更津・市原・鋸南・南房総方面は帰る手だてを失うこととなりました。保護者との合流地点を決め再び送迎バスは発車しますが道路は大渋滞。やがて携帯電話も不通となりどこにも連絡が取れずまさに孤立。一時間かかって木更津駅に到着しても保護者と連絡が取れず、駅のロータリーを職員が走り回ってようやく合流できました。しかし一名は迎えがかなり遅くなることから新生舎に一旦戻って迎えを待つことに。二十一時ようやく母親が到着したときの彼の顔からは「安堵」が伺えました。

このようにして震災当日はなんとか過ぎましたが余震や計画停電、J Rの間引き運転等々、その影響は大きく未だに解決されていない現状にあります。利用者の出勤も再開しようやく元の状態に戻りつつありますが出勤したくても出勤できない利用者もあり全員が揃う日がいつになるのか心配なところです。

震災から数日たったある昼休みのことでした。テレビで震災の報道を見ていた一人の利用者が「大変だよー。頑張っ。」とテレビに向かってつぶやいていました。今何が起きている、今何をしなければならぬかをこの利用者は理解し、私たちに問いかけるように鳥肌の立つ思いをしました。

津波に流されていく街や車。逃げ惑う人。壊滅した街を呆然と眺める老人。瓦礫の街で

子どもの名を叫ぶ母親。遺体を示す赤い旗を前に手を合わせるおばあさん。我々が報道を通じて見るものはその極く一部に過ぎず、現地ではもっと過酷で悲惨な光景があったと想像できます。今私たちが第一にすべきことは救援や救済・支援ではありませんが、これからすべきことは私たちの子や孫、そして未来にまでこの震災の光景を教訓や戒めとして伝え続けるとともに、極限下でも秩序ある行動をとった日本人としての誇りを伝えたいと考えています。

一体型共同生活介護事業所 グレースホーム

「第二グレースホーム」の避難生活

世話人 樋口 千恵

東日本大地震・津波により被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。

三月十一日、東北地方から関東までの太平洋沿岸部を襲った地震によって富津でも強い揺れの後、大津波警報が発令されました。グレースホームの中でも、海に近く平屋建ての第二グレースホームに住む利用者四名は、すぐに法人職員住宅の二階にある第一グレースホームに避難しました。また、余震も続いていることで、利用者の安全確保を図るため、夜間管理者二名を置くなどの対策を講じることになりました。

当初は、三日間程度を考えていた避難体制

でしたが、余震も続き計画停電も行われたため、第二グレース利用者の避難生活は二週間ほどになってしまいました。

こうした体制のなかで、何より心配したのは、第二グレースホーム利用者の慣れない場所での共同生活という、環境の変化が及ぼす影響です。六畳ほどしかない空間に、四名が寝なくてはならないという、昔で言う合宿所のような状態であったことや、避難先の第一グレースホーム利用者への気遣いなどによりストレスがたまり、精神的に不安定になってしまふのではということでした。しかし、世話人の心配をよそに、不安と緊張もすぐに和らぎ、余裕でこんな発言も……。「こんな時だからね、しょうがないよ。」「あっちの人に比べたらなんでもないよ。」「旅行みたいで楽しいよ。」「……楽しい？は被災され避難生活でご苦労されている方々に対し甚だ不謹慎ではあるが、とにかく間借りでの生活でも不満を言うときではないと、理解してくれているようでした。

また、計画停電の実施後、特に夜間の停電では、転んでケガをしないように、風邪をひかないようにと注意をしながら、じっと停電が終わるのを待っています。灯りが消え暖房も使えない寒いなか、みんなで懐中電灯の小さな灯りを囲みながら電気の大切さを感じているようです。こうしたなか、高齢の人から「昔はさあ」と話しが始まり「今は贅沢だよ」とみんなで頷く。みんなでこの震災

を忘れず、電気のある生活に感謝しながら暮らしていこうと話しているが、本当に震災はまたいつ起こるかわかりません。その時、私たち世話人はどのようにこの利用者の人達を守っていけるか。人の命をあずかる私たち職員こそこの恐さを忘れずに対策を考え、支援していかなければならないと痛感しています。この震災により、地震や津波の恐ろしさとともに、人の優しさ・たくましさも感じます。まだまだ哀しみや不安は続きますが、きっと立ち直る。きっと復興する。今、日本中、世界中が大きな声援をあげています。そしてこの富津の片隅からも。「頑張ろう日本」。

地域活動支援センター 望みの門ヨカデイスサービスセンター 今思うこと



指導員 南雲いずみ

三月十一日に、かつてない大地震が東北地方を襲いました。その日は、暖かい日でしたので、私たちは今年初めての散歩に出かけました。これから、外の活動も始まることで皆さんは嬉しく思いながら、「今度はどこに行く？」と楽しい会話がはずみました。帰ってきておやつ準備を始めたその時、いままでに体験をしたことない大きな揺れに一気に不安になりました。「テーブルの下に潜って」の職員の声、すでに腰を抜かして動けなくなった人、泣き出す人もいましたが、けが人

もなく無事に避難できました。

その後の報道で想像を絶する大震災であったことを知りました。テレビを見て、涙した利用者さんが「何かしてあげたい」と言いました。「みんな元気になりますようにとお祈りをする」「お金を送る」「食べ物を送る」などの話の中、「みんなで仲良くしよう」「勝手な行動はしないにする」「水を出し放しにしない」「おやつのお茶を一杯だけに我慢する」と言う話がありました。余震が続き、福島原発の問題もあり、不安が続く毎日ですが真剣に皆さんが被災者のことを考えました。この震災で私たちができることは些細なことですが、一人ひとりのこの小さな思い、小さな行動が結ばれ大きな支えをつくっていくと信じています。

私事です、が、両親の看病と介護のために長期休業をいただきました。その間、「両親が元氣になりますように」と祈り続けて下さった利用者の皆さん、仕事を代行して下さいった職員の皆さんの助けがあって両親も回復に向かい職場に戻ることができました。心から感謝申し上げます。顔の見える人、見えない人もお互いに助け合って生きていることを実感しました。

ヨカデイスサービスセンターでも、相手の気持ちの思い助け合いながら、自分ができることを行い、また職員は利用者の皆さんの一人ひとりの気持ちに寄り添いながら、活動をしていきたいと思っています。

千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット

障害児・者コーディネーター 川澄耕一郎

三月十一日、未曾有の大震災で、多くの方々が被災されました。

お亡くなりになられた方々には、心より哀悼の意を表します。また、今も苦しい状況に忍耐しておられる方々が、一日でも早くもとの生活を取り戻せるよう、祈念いたします。

千葉県にも多くの方々が避難してきており、子どもの進学や就労についての相談が君津ふくしネットにも寄せられています。もともと君津圏域に住んでいた人たちからも、原発事故への不安や今後の見通しなどについての相談が増えました。

私たちは、相談者からのニーズを聞き取り、情報を伝え、社会資源へと繋いでいく努力をしています。また、既存の社会資源では十分なときは、地域の団体や行政と協力して資源を作り出すよう働きかけていきたいと思っています。

今回のような突然の事態では、新たなニーズが生じてくることもあると思います。迅速な対応のためには、中核センターの特徴である横断的な動き方が最も求められていると感じています。

日本中が厳しい新年度を迎えました。気持ちを強くもって、地域の原動力になれるよ

う頑張っていきたいと思っています。

児童養護施設 望みの門かずさの里

平成二十二年度を振り返って

保育士 高島 宏美

平成二十二年六月十六日に望みの門かずさの里に来てから短いようで、長く感じた九ヶ月でした。

子ども達との生活に最初は不安でいっぱいだった私も、今では子ども達との他愛もない話しやちよっとした成長も喜びのひとつとなりました。

夏のキャンプでのとても楽しそうな笑顔や、各学校で行われた運動会で見せた真剣な顔、千児協の文化祭では練習から一生懸命取り組み、本番はとても緊張していましたが、堂々と手話やダンスを披露してくれました。

千児協のマラソン大会では皆が諦めず最後まで走る姿を見る事ができ、とても感動しました。他にもたくさんの行事があり、その都度子ども達は普

段の生活の中ではなかなか見ることのない表情を見せてくれ、とても楽しく、充実した九ヶ月



月であったと思います。

そして、二十二年度は里から初めて二人の子どもが巣立ちました。受験や自立に向けての経験の中で、一回りも二回りも大きく成長した様に思います。これからもっと楽しい事も辛い事も経験する事と思いますが、強く前向きに頑張っていきたいと思います。そしてまた笑って里に遊びに来てくれると信じています。この九ヶ月は色々な事がありましたが、今年度も子ども達と一緒に悩み、笑い合う日々が始まりました。またこの一年、子ども達がどんな表情を見せてくれるのか楽しみです。

乳児院 望みの門方舟乳児園

タイガーマスク運動と小さな手

園長 佐野 毅

昨年の暮れあたりから全国で「タイガーマスク（伊達直人）」と称する匿名の篤志家から全国の児童養護施設や乳児院等に現金やランドセル、学用品などが突然届けられる、という社会現象が沸き起こりました。

私たち児童福祉関係者は、突然の朗報に大変驚いたと同時に大変ありがたいことだ、と感謝しておりました。何処のどなた様が始められたかは全く分かりませんが、その動きがいつの間にか全国に広まって、方舟乳児園にもベビー靴や衣類等「こどもの為に」と沢山の金品をいただきました。中には、お独り

暮らしのお年寄りの方から、「僅かな年金をコツコツと貯めた中から、施設のことでもたちのために使ってください。」と、ご自分の年金を節約されてお届けくださったご高齢のご婦人もいらっしゃいました。本当に感謝です。

その社会現象も始まって東の間。遠く離れたニュージーランドの大震災で多くの邦人が犠牲になり、その悲しみも冷めやらぬ間に、今度は東北地方で巨大地震が発生し戦後最悪な大惨事となってしまいました。震災の爪跡も未だ生々しく、被災された方々や当地にご親族がいらっしゃるご関係の方々には、言葉にならないほど大変な日々を送っていらっしゃるかと存じます。

この場をお借りして、全国の「タイガーマスク様」へ。今度は、ぜひ東北地方の被災された方々へ、そのお心をお届けください。そして、今度は私たちも頂いた善意にお応えする番であると肝に銘じて、当地の方々の復興支援にご協力させていただきたく存じます。



そのためには、毎日のように行われる「計画停電」などは、我慢できます。我慢しなくてはなりません。幼い子どもたちを守りながら、被災地復興支援に向けて今私たちが出来ることを一つひとつ実行していく所存です。

日本財団助成事業完了のお知らせ

このたび日本財団から、平成二十二年度助成金の交付を受けて、左記の事業を完了致しました。

ここに事業完了のご報告を申し上げますと共に、日本財団をはじめご協力を賜りました関係者の皆様に謹んで感謝の意を表します。

記

- | | |
|---------|------------------------|
| 一、事業名 | 軽トラックの整備 |
| 一、整備車両 | 三菱 ミニキャブ |
| 一、事業費総額 | 六七・一万円 |
| 一、助成金額 | 五十三万円 |
| 一、施設名称 | 知的障害者通所授産施設
望みの門新生舎 |
| 一、施設所在地 | 千葉県富津市川名一四三六 |
| 一、完了日 | 平成二十三年三月四日 |
- 社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

理事長 木下 宣世

編集後記

巻頭言に理事長の時宜を得たお言葉をいただいた。今の時日本人のすべてが福祉の心を持っているかのよう、惨状の報道の中に、各地での被災者に対する支援活動を目にする。キリストの隣人愛、仏陀の慈悲、憐びんの情など言わずとも、日本人には本来優しいDNAがたっぷり備わっているようだと言えは笑われようか。……今は亡き母が二十歳代に関東大震災にあった体験をよく聞かれ、震災が、被服廠の焼死体の山が、等と口癖のように言っていたのを思い出す。それから九〇年、十六年前に阪神大震災、その間には、新潟大地震、ついこの前は、霧島新燃岳の大噴火など、本当に日本列島は何時なにが起きてもおかしくないようだ。しかし今度は、原発大事故のオマケまで付いている。健忘症の国民の一人として天災、人災のことはすぐ忘れて、そのせいか病氣にもならず生きている。わすれてはならないものがある。人は本来一人では生きられず、互いに助け合っていることを。福祉人には頂門の一針。四月、桜の時季を迎えた。里の児童四名が小学校、三名が中学に入学した。オープンの年クリスマス会の祝会で泣いていた舜君もその一人である。五年目の春を児童の里は迎える。歳月は人を待たず。四月一日現在職員数一八五名、内非常勤者数四〇名である。採用者十五名、退職者八名、内部異動十七名、昇格者十五名、本年度人事の一部は来春の特養開設を射程に入れたものである。今月十二日には介護予防一般登録者二〇名余でお花見が予定されている。被災地を思うと申し訳ない気もするが、委縮してはなるまい。一日も早く春や春、春爛漫の桜かなと日本中で楽しみたいものだ。

(Y・I)